

2025年1月15日 マリヤ会 奨励

赤井博夫

『若い日に造り主を覚えよ』 伝道者の書12章1節 賛美：新聖歌 221番

今日は伝道者の書から共に学びたいと思います。

この伝道者の書は1章1節を見ますと、『エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば』とされていますから、ソロモンが書き記したと考えられます。

イエス様はこのソロモンのことを、あの山上の説教のマタイの福音書6章29節で『栄華を極めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした』とされています。

ソロモンはダビデと姦淫のバテシバとの間に生まれました。イスラエル王国三代目の王で、在位は紀元前10世紀ごろとされています。

Ⅱ歴代記9章22節を見ますと『ソロモン王は、富と知恵において、地上のどの王よりもまさっていた。地上のすべての王は、**神が彼の心に授けられた知恵**を聞こうとして、ソロモンに謁見を求めた。』とあります。

伝道者はヘブル語でコヘレトです。コヘレトとは集める人という意味です。福音を語る人という意味ではありません。何を集める人か。言葉（格言・教訓）を集め、人を集め、語る人ということになります。

私は5、6歳の頃から18歳までの13年間は教会につながっていました。しかし19歳から32歳までの13年間は教会から離れた生活をいたしました。離れていた13年間も聖書は手元にありました。時々開いて読んでいたのはこの『伝道者の書』でした。ですから今日の『あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わがわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」という年月が近づく前に』という言葉は、まさに私の青春とともにありました。

父の使っていた新改訳聖書のこの箇所には『2007年7月18日太子コイノニア』というメモ書きがあって、『老後の対策は大丈夫ですか』とタイトルのようなメモも書かれています。どなたか先生がこのところから奨励をされたのか、父がしたのかはわかりません。

新共同訳では『青春の日々にこそお前の創造主に心を留めよ。苦しみの日が来ないうちに。「年を重ねることに喜びはない」という年齢にならないうちに。』と訳されています。

ソロモンはこの伝道者の書を晩年に書いたと思われます。1章の13節～14節には『私は、天の下で行われる一切のことについて、知恵を用いて、一心に尋ね、探り出そうとした。これは、人の子らが労苦するやうにと神が与えられたつらい仕事だ。私は、日の下で行なわれたすべてのわざをみたが、なんと、すべてがむなしいことよ、風を追うやうなものだ。』と『すべてのわざをみた』とありますから。

この『むなしい・空』と言う言葉が、この伝道者の書では貫かれています。

私が教会を離れていた時も、私の友人の中には寺の住職がいたり、創価学会員も何人かいました。いわゆる仏教に『色即是空』ということばがあります。この世にあるすべてのもの（色）は因と縁によって存在しているだけで、固有の本質をもっていない（空）とい

うことであります。私はこの伝道者の書の『空』をよく理解していたわけではありません。ただ仏教徒の友人と語る時に、「聖書もよく似てるやろ」と話していたことを思い出します。

しかしここでいう『空の空』は空しいではなく、『空の中の空は神様のこと』で、人間の求める富にも知恵にも限界がある。人は神の御業を理解できず、変えることはできない。神様はご自分を『在って在る者』と言われました。人は何かの支えがあって存在しています。しかし、神様は何の支えもなく存在しておられます。この存在を人智では理解できない「空しさ」があります。しかし、その『存在』を知っておくことが知恵のはじめです。

老子の言葉に「天網恢恢疎にして漏らさず」がありますが、天の網は目があらいようだが、悪人を漏らさず捕らえる。天道は厳正で悪事をはたらいた者には必ずその報いがある、という意味です。

若い日に何を覚えるのか。二つです。「神をおそれる」と「神の命令を守る」ことです。あのモーセの十戒には、わたし以外に神としてはいけないとか父と母を敬え、盗むな、殺すななど十の戒めが書かれています。

今日の12章の13節に『結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ』とあります。

若い日は文字通りいけば、青春時代でしょうが、誰にとっても、一番若い日は今日であります。私は私の父と母から生まれました。ソロモンは父ダビデと母バテシバから生まれました。3章2節で『生まれるに時があり、死ぬのに時がある』とあります。しかし、これも人間が決定できるものではありません。

3章11節の後半に『神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない』とあります。これは人間の限界であり、空しさです。

年をとれば、だれでも多かれ少なかれ、視力が衰える、耳も遠くなる、足腰も弱る、食べる力も弱る、モノを覚えられない、忘れる、一人で立てなくなる、歩けない、やがてベッドで過ごすようになります。

父は最晩年一人で歩けないくらい弱りました。その時、外に連れ出して父を抱えるようにして家の周りを歩きました。父はその時「ああこれがしたかった」と言って喜んでくれました。父が亡くなる1週間前に家族で食事をしました。これが最後の晩餐になりました。この時の父の祈りは「一瞬一瞬の祈りが大切」でした。晩年はよく「ゆだねてる」と言う言葉を使っていました。

私たち人間は、見きわめることができないが、確かに神がおられ、すべてを支配され、私たちが生きるも死ぬるもこの方の御手の中にある。だからこの方を恐れ、命令を守る大切さを若い日、すなわち今日知って、ただみこころに生きることこそ、この疾風怒涛のような時代にあっても、主に在る平安と希望に生きることができるのです。

だから『あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ』とソロモンは語るのです。